



Title	関先生を偲ぶ
Author(s)	山下, 好孝; Yamashita, Yoshitaka
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 11, 3-4
Issue Date	2008-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45670
Type	other
File Information	BISC011_003.pdf



関先生を偲ぶ

私の目の前に一台のコンピューターがある。Dell というメーカーの黒塗りのパソコンだ。このパソコンは私が2003年に中国へ出張する前に買ったものだ。半年間、遊ばせておくのもなんだから、新しいパソコンを探しておられた関先生にお貸しすることにした。その時、このパソコンが関先生の最後のメインパソコンになるとは思ってもみなかった。

関先生にお会いしたのは私が北大留学生センターに赴任した1992年3月のことだった。その1ヶ月ほど前に札幌に来て、事務の人と相談し、南新川の寮にとりあえず私一人だけ入り、当時、ブラジルにいた家族は後で呼び寄せることになっていた。とにかくスーツケース一つ持って札幌に舞い戻ったのだが、家財道具は一切なかった。最悪の場合は布団だけ手に入れて寝るつもりだったが、関先生が声をかけてくださった。関先生の関係するミカエル教会の寮が空いているので、学生と一緒にでもよかったら、そこへ来ないかというお話しだった。暖房も食事も用意されていると聞いて、大いに勇気づけられたのを今でも覚えている。

ミカエル寮には結局3ヶ月お世話になった。その間、寮生の北大生や中国人留学生のみなどと仲良くなれた。そして、頻繁に寮にいらっしゃる関先生の姿が非常に印象的だった。助教授(当時)の肩書きにもかかわらず、寮生達とはいっしょにはしゃぎ、いっしょに笑い、一緒に食事をされたりしていた。関先生は興が乗ると、鬼のお面の形態模写を出してこられ、一同大笑いだった。若い学生達との付き合い方の中に、関先生の人柄や、学生指導に対する情熱というものを感じた。

その後、賃貸マンションを見つけミカエル寮を出ることになったが、そこで知り合った中国の留学生に定期的に中国語を習ったりして、寮との縁は切れなかった。関先生が私に最初にくださったプレゼントがこの寮生活の機会だったと言える。

それから16年、北大での生活にこちらが慣れるにつれ、関先生を逆に助けることもあった。特に、関先生がパソコンを導入されてからは、「プライベート・インストラクター」に就任したようなものだった。何かトラブルが起るとすぐに研究室から飛んできて、私に助けを求められたのだ

が、決していやではなかった。むしろ、このように自分の知らないことは素直に人に聞くという姿勢が自然に出来ている関先生がうらやましいと思っただけである。

私に対するのと同様の姿勢を関先生は留学生にも示されていた。

学生達が困ったことがあると、関先生の豊富な人脈を通じて助けを呼び、一つ一つ解決して行かれた。その反面、学生を上手にを使って韓国語や中国語を教えさせたり、他の留学生の手助けをさせたりされていた。学生達はそれを決して「やらされている」とは取っていない。関研究室の掃除などは、学生達が率先して手伝っていた。私もスペイン語を手ほどきしたり、デジカメやパソコンの情報を研究室に持って行ったりもした。

2003年にお貸しした Dell のパソコンはそれからずっと関先生の伴侶となった。当初はトラブルもよくあったが、最近に関先生の方でパソコンを手なづけられたようで、大いに活用されていた。癌で入院されていた時期にも、週末研究室に出てこられ、このパソコンでメールの整理をされていた姿を思い出す。

目の前にある、このパソコンの中には関先生がやりとりされた膨大なメールが残っている。学生に対するアドバイスや、貴重な連絡先が詰まっている。デジカメの写真やプレゼンテーションで使われた詳細なデータもある。

しかし、このパソコンのハードディスクをフォーマットし、データをゼロにしなければならない時がやってきた。関先生が残された貴重な資料は関先生ご本人でしか活用出来ないのだと自分に言い聞かせ、このつらい仕事にとりかかろうと思う。

山下 好孝（留学生センター教授）